

キム・ソウン
金素雲の子ども観
—— 朝鮮の「おさなごころ」と「民族」、
『朝鮮童謡選』と郷土の子どもたちへの想い

大竹聖美

1. はじめに

近代以降の日韓文化関係史を振り返るとき、詩や文学の方面で重要な業績を残した人物の一人として金素雲^{キム・ソウン}があげられる。卓越した日本語を駆使し、朝鮮の詩歌を日本語訳し、朝鮮の民族精神を日本に紹介した人物として高い評価を受けている。

1930 年前後から、北原白秋の後押しで名声を確立し、日韓を行き来しながら朝鮮詩歌の翻訳や歴史物語の著述を行い、日本人の朝鮮文化理解に大きな役割を果たした。

しかし、日本側の高い評価に比べて、解放後（日本でいう戦後）の韓国側の金素雲に対する見方は厳しかった。その代表例は舌禍事件である。『朝日新聞』掲載の記事「最近の韓国事情」（1952 年 9 月 24 日）で、金素雲が語っている内容が韓国政府を批判していると問題になり、駐日韓国代表部にパスポートを没収されて以降、13 年（1952 ～ 1965 年）もの長い年月にわたって母国の土を踏むことを許されず、日本での幽閉生活を余儀なくされた。また、林鐘国^{イム・ジョンク}の『親日文学論』（平和出版社、1966 年 8 月 15 日）においても親日派として指摘されているように、本国では冷遇された。それでも晩年にはそれなりの評価を受け、1977 年、69 歳で韓国翻訳文学賞（韓国ペンクラブ）を受賞、1980 年、72 歳で銀冠文化勲章を大韓民国から授与された。

いずれにしても、日韓の文化理解と交流において金素雲の存在は大きく、特に東京大学の比較文学会を中心として、金素雲の研究と業績に対する評価は積極的に行われてきた。¹

ところで、これまで行われてきた金素雲研究の多くは、『朝鮮詩集』での訳業を中心とした詩人としての業績の分析に重点がおかれていた。金素雲は北原白秋に認められて、1933 年に『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』を岩波書店から出版できたことでその地位を確立したのであるし、『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』『朝鮮詩集』によって、日本人が朝鮮の美しい詩心に触れたことは、確かに類まれな業績であったに違いない。

しかし、こうした金素雲の詩心とその思想に関して、彼を最初に評価した北原白秋との関連、特に、北原白秋が当時流行した「童心芸術主義」の文化潮流、いわゆ

る大正児童文化運動の中心人物であった点から考察されたことはこれまでほとんどなかった。筆者は、金素雲の思想を考える上で、「童心」と「郷土」が、核心をなすキーワードであると考えている。さらに、金素雲が朝鮮で児童文化運動に心血を注いだこともほとんど注目されていない。しかし、筆者は金素雲の朝鮮児童文化運動を極めて興味深くとらえているし、近代児童文化・文学研究の領域では見過ごすことのできない現象であると把握している。

本稿では、これまで研究されてこなかった児童文化研究の視点から、金素雲の「童心」と「郷土」への眼差しを1930年前後の日本の児童文化文学の領域における「童心芸術主義」との関連で考察したい。

2.『朝鮮童謡選』

金素雲の業績としてまずはじめにあげられるものに、日本語で出版された『朝鮮童謡選』がある。『朝鮮童謡選』が日本においてどう受け入れられ、金素雲がどういう心境で出版したのか以下順を追って考察する。

(1)『朝鮮童謡選』の必要性

——日本人が「朝鮮において知らねばならぬこと」

1933年1月、金素雲の『朝鮮童謡選』は、「内地」の日本人にとっても、「半島朝鮮」に居住する日本人にとっても、「待望久しかりしもの」として岩波書店から刊行された。

例えば、植民地朝鮮における朝鮮総督府管理下の教員団体、朝鮮教育会が発行する植民地朝鮮の教育雑誌『文教の朝鮮』1933年7月号には、以下のような〈公告〉が載せられた。

〈公告〉 金素雲訳編「朝鮮童謡選」岩波文庫

本書は編者十年の熱意の収穫として三百余人の協力の下に全鮮各地より選集された口伝民謡の資料から童謡のみをすぐり移訳したもので一首毎に原歌番号を附し学究者の利便とする一方民族詩としての香気を失はざらしめんがため訳出に細心の注意を施したのである。朝鮮に於て知らねばならぬことが我々に多々ある。ただそれを知るに困難なるがためとかく後まわしとなり勝ちであるが、本書の如きはその意味だけでも待望久しかりしものと言わねばならぬ。

近刊「民謡・婦謡選」岩波文庫 定価 40 銭、送料 4 銭 岩波書店刊行
販売：日韓書房、大阪屋号ⁱⁱ

この〈公告〉を見ると、当時朝鮮に滞在していた日本人のこの本に対する公的な評価を知ることができる。ここでは、まず「(朝鮮) 民族詩としての香気」(括弧内：筆者) に価値を置き、「朝鮮に於て知らねばならぬことが我々に多々ある」と、朝鮮の文化を尊重する態度を示している。しかし、本書が刊行されたことの意味は、結局、その「知らねばならぬこと」を「日本語で」提供してくれたという部分にある。これはやはり、統治者としての優位な立場にあるものの態度である。「知るに困難なるがためとかく後まわしとなり勝ち」というのは、朝鮮語を理解し、朝鮮の心を理解しようとすることを怠っていた者の言い訳、あるいは、優位と傲慢の表現であろう。

しかし、朝鮮の民族詩への関心を表明し、日本人は朝鮮の民族性を知らなくてはならないと述べている点では一定の評価は可能である。

(2) 「芸術の上で、民族文化の上で」の民族主義

『朝鮮童謡選』を出版した金素雲は、その長い序文を以下のように始めている。

〈朝鮮の児童たちに〉 序に代えて

ふるさとの幼い人たち、このささやかな贈り物にことづけて、こころからなる信愛を君たちにおくる。

いささかの感傷をゆるしてくれたまえ。郷土に別れて十余年、心ならずも君たちとは遠く道を隔てて過越した。郷愁の古苔も、もはや私を悲しませはしない。芸術の上で、民族文化の上で、世界主義に立つことを潔しとせぬ私も、生活の實際に在っては、この言葉を拒むことの出来ない一人となってしまう。ⁱⁱⁱ

朝鮮の伝統文化と民族精神を、卓抜な日本語で紹介したとして評価の高い金素雲であるが、はやくも最初の業績である『朝鮮童謡選』の序文において、その「芸術の上で、民族文化の上で」表現した「民族主義」、その一方、「生活の實際」での「世界主義」と、二つの方向が表明されている。解放後の韓国においては、この「生活の實際」での「世界主義」的部分が批判を受けた。韓国における金素雲の評価は「親日派」^{iv}として記録されているのである。^vしかし、「生活の實際」での「世界主

義」というのは、実際の生活で非常な困難を経験した金素雲の実体験から編み出された苦肉の処世術であり、むしろ内面的に強く意識されたのは民族固有の精神の存在だったのである。

それでも私は自分のただ一つの誇を忘れはしない。

君たちと郷国を一つにして生まれたことは何という幸せな偶然であつたろう。いや、これは偶然ではない。数字は一から始まる。君たちと私のつながりは伝統の一の単位から始まっている。君たちの呼吸する息吹は、それは私の息吹だ。君たちの泣き歪めた顔、それは私の顔なのだ。君たちの憧憬、君たちの歓呼、君たちの意欲、さては五体に脈打つ君たちの血潮さえが悉くそのまま私のものではないか。誰がよくこの根深い約束を断ち阻むことが出来ると思う。^{vi}

金素雲はこの文章を涙ながらに書いたという。^{vii}この序文に現れているのは誰も否定できない固有の民族性の主張である。金素雲はこの民族性、民族固有の精神というものを、以下のように述べている。

君たちの「一人」は同時に君たちの「全体」なのだ。大きな一つの網目となつて、千に万に君たちは結びつながれている。君たちの心は一つだ。その一つの心が君たちの歌を生み、君たちの精神をつくり上げている。^{viii}

つまり、ここで金素雲が「全体」とか、「大きな一つの網目」とか、「一つの心」といっているのは民族のことであり、その民族性こそが歌を生み精神をつくるといっているのである。まさに金素雲は「芸術の上で、民族文化の上で」民族主義者だったのである。

(3) 朝鮮童謡の民族性

「童謡」については、以下のように解説している。

君たちの歌は何よりも力づよい君たちの精神の表現だ。君たちは太陽のかげつたとき空を見上げていう――

日よ 日よ 紅え日よ

漬物（キムチ）の汁で めし食べて

長鼓鳴らして 出て来い。

皆まで言わぬうちに、雲間から熱った円い顔をのぞかせて太陽は君たちに笑いかける、君たちは太陽の赤ら顔を見て酒に酔うた人の顔を思い出す。そこで連想するのは長鼓だ。あの賑やかな楽しい音色——。それからキムチでめしを食べるというのは、君たちが遊び過ごしてついお腹を空かしたとき家へ駆け込んで大急ぎで御飯を食べる——あの時の心持だ。雲の中へ太陽が逃げ込んだのはきとお腹が空いたからに違いない。そこで君たちは露地の外に置いてけぼりを食わされた身になって、太陽に早く出て来いと催促する。ゆっくり御馳走など食べていられては大変だ、漬物の汁で二匙三匙かき込んだら、また大急ぎで飛び出して来い——、二行か三行のこの短い歌の言葉に、どうだ、君たちの生き生きした心がむき出しに露わされているではないか。君たちを泣き虫で怠者だという人に私はかぶりを振って「違う」という。君たちのこの澁刺たる精神を知り抜いてるからだ。^x

日本では、それなりに「朝鮮観」というものがあつた。当時の日本人の認識においては、「泣き虫」で「怠け者」というのが一つの典型的な「朝鮮観」として流通していたのは確かである。^x 金素雲は続けてこういう。

さて、君たちの生活観や現実に対する心構えはどうであろう？

にわか雨に晴衣を濡らすことがあっても、足の運びは早めない——、そうした「沈着」と「余裕」を君たちの父祖は人格の本道として愛した。古い昔から、絵画や工芸美術、衣の紐や舞の手に現れた柔和な線の持ち味が、何よりもよくこの民族性を反映している。閑雅なこの伝統を継承する君たちに、殺伐な武勇の精神が分かる筈はない。「桃太郎」の凱旋が君たちにとってはこの上なく退屈であるように、君たちには君たちだけが知る心情の世界があり、その世界だけで君たちは思うさま翼を拡げて君たちの精神の高さを翔けることが出来るのだ。日本の童謡では「蝸牛」を見て「角出せ、槍出せ」と言い「出さなきゃ鉄でチョン切るぞ」と威すが、君たちは武骨な注文の代りに「長鼓を鳴らし、舞をまえ」と所望する。この飽くまで温雅な性情は、しかし時として君たちの柔和を「柔弱」と置き換えてはいないか？ 自然児の澁刺たる魂を持ちながら、生活に向けられる君たちの意欲はとかく控えめで遠慮がちだ。^{xi}

このように金素雲は「沈着」と「余裕」「柔和」「閑雅」「温雅」を朝鮮の民族的

特性として重視し、「桃太郎」を代表とする日本の児童文化の精神を「殺伐な武勇の精神」と呼び、韓国子ども達には「この上なく退屈」だと指摘している。この指摘は大変重要である。戦後の民主化の中で、日本の児童文化は、「桃太郎」を否定した。鬼退治が侵略戦争と重なるという理由からである。しかし、1930年代、まさに全体主義へと日本が傾き始めたこの時節に、すでに金素雲という朝鮮の詩人が「桃太郎」は「殺伐な武勇の精神」のあらわれであって、「この上なく退屈」であると述べていたことは注目に値する。当時の日本人は、この言葉をどう受け止めたのだろうか。そのころの日本は、巖谷小波に代表される「桃太郎主義」の子ども観が大手を振っていた時代である。戦後、韓国の研究者から巖谷小波の軍国主義を指摘^{xii}されるのを待たずとも、すでに金素雲は1930年代に指摘していたのである。

3. 北原白秋との関係

(1) 北原白秋の朝鮮観

一方、金素雲を最初に評価し、文壇に紹介した人物は北原白秋である。白秋は児童文化史において「童心芸術主義運動」の代表、近代童謡文化の黄金期を作った立役者として大きな位置を占めている。その白秋の朝鮮観は次の通りであった。

幼い頃、私達筑後柳河の童子は朝鮮のことを単に韓と呼んでいた。もとよりの邪馬台の故土である故、韓土との交通が上代より既に盛盛であったにちがいない。私たちには東京という言葉よりも韓という名がより親しく懐しまれた。つい海の向こうだという気がしていたのである。私の村にも鯨組という一団の遠洋漁業隊があつて、片々たる小舟に乗じては、毎春秋釜山から元山津あたりの沿海までも稼ぎまわっていた。不知火の筑紫潟から五島、平戸、対州を経て、飛石づたいに渡ったものである。古老の夜話にも韓のことがよく語られもすれば、漁師の女房たちにも降って湧いたような韓の子の母に対する嫉妬沙汰もよく起った。

考えて見ると、私なぞは古代日本と朝鮮、シナ、南洋、或は阿蘭陀文化の雑種のようなものである。そうした混淆した土俗・伝説・言語の間に育てられて、かえって同じ日本の東北地方とは縁の遠い私達児童であった。^{xiii}

帝国主義が世界を覆った近代は、国家権力が増大した時代だったが、各地域に生

活する民衆のレベルでは、依然、悠久の近代以前が優位を占めていた。東京を中心とする日本という帝国を共通項とする日本東北地域よりも、地理的に近い玄海灘を中心とした地域（朝鮮・九州）がむしろ生活圈、文化圏として親しみが持てたと証言している。

(2) 北原白秋の朝鮮「童・民謡」観

次に、北原白秋の朝鮮「童・民謡」観を見てみたい。

朝鮮の童・民謡は国情国性の然らしむる幾多の理由において、日本のそれら以上の辛辣な皮肉と譏笑とに恵まれている。悲痛味も多い。表面的の儀礼と語彙とにおいては寧ろシナの影響から禍いされすぎている。ただ純粹の童謡においては児童性の天真流露と東洋的風体とを通じて日本のそれらと極めて近似関係にある。童謡は殆んど東西軌を一にしているが、いわゆる韓の児童生活と感情とは筑後柳河の私たち童子にことに親しみ深く交流するものがあって、それらは愈々私の微笑を豊かにしてくれる。^{xiv}

白秋は、朝鮮の童謡は、児童性、児童生活と感情において、日本人にとっても「親しみ深く交流するものがある」と述べている。そして、朝鮮と日本は、「児童性の天真流露」と「東洋的風体」において「極めて近似関係にある」と言う。さて、こうした白秋の言葉は、金素雲や朝鮮の民族性を受容する言葉としてとらえてよいものなのだろうか。実は、このような言葉は、当時の国策を補強するためのイデオロギーであった「内鮮一体」の掛け声や、その根拠として学術的にも盛んに論じられた「日朝同祖論」といった言説につながるものがあり、注意して読まなくてはならない部分でもある。白秋の「童・民謡」観は、その点を見究めつつ読まれるべきだろう。

4. 金素雲の願い

(1) 朝鮮の児童たちに——「文化の精神の上で迷児となるな。奇形児と呼ばれるな」

金素雲は、『朝鮮童謡選』の序文〈朝鮮の児童たちに〉の最後の部分で、次のように述べている。

君たちの歌は、君たちが伝統の継承者として祖先の時代から一筋に受継いだものだ。君たちにとっては大切な系図ともなるもので、ここには君たちのたどり来た「精神」の記録が綴られている。しかしながら、君たちはいつまでも「昨日の子」ではない。ここに訳された童謡も、僅少な例外を除いて大方は忘れ去られたであろう。それはよい。私とて君たちに過去帳の復読をさせようとは願わない。ただ畏れるのは、旧殻を棄つるに急な余り、伝統の精神までも君たちが没却してはいないかということだ。「きのう」を忘れて成立つ「あす」はない。古い礎石の上に新たな「今日」を打建てることは、君たちに許された莊嚴な権利でもある。文化の精神の上で迷児となるな。奇形児と呼ばれるな。君たちに伝える切実な私の希求はこれだ。

世紀は開ける。君たちの背後には暗い歴史が続いた。今こそ君たちの手で、君たちの鶴嘴で、新たな光明を打拓くのだ。ペンペン草の生えた廢屋を立出でて「光の世紀」へ発足するのだ。君たちの使命は重い。

朝の微風が君達を呼ぶ。蒼空は君たちの上にある。

1932 年 11 月 東京 上落合 金素雲^{xv}

解放後の韓国では「親日」作家として批判された金素雲であるが、当時の困難な時代状況のなかで、このように朝鮮の「伝統の精神」を強調し、それを失ってはならないことを強調していたことは大いに注目すべきである。当時の朝鮮の状況に関して、「旧殻を棄つるに急な余り、伝統の精神までも君たちが没却してはいないか」と心配している。また、金素雲が「伝統の精神」を何よりも大切に考える理由は、「「きのう」を忘れて成立つ「あす」はない」ということからである。そして、「古い礎石の上に新たな「今日」を打建て」ろというのが、朝鮮の子ども達への金素雲のメッセージだった。「文化の精神の上で迷児となるな。奇形児と呼ばれるな。君たちに伝える切実な私の希求はこれだ。」金素雲の切実な願いが叙述されている。

解放後、この記念碑的な熱のこもった序文に関して、金素雲自身は次のように回想している。

延々 12 ページに及ぶこのような序文を、私は岩波文庫のはしがきに付した。どう見ても、この意気軒昂とした文は口伝童民謡をよその国に紹介する文ではない。^{xvi}

さらに、当時の心境として次のように告白している。

白銅の十銭玉一つを穴に入れるとガスストーブに火がともる、東京東中野の静修園アパートの冷えびえとした部屋で、目頭を濡らしながらこの序文を書いたあの夜を、私は忘れられない。わが祖国、わが郷土を愛しながらも、「愛する」と一言口に出せなかった頃——、抑圧された激情、身にしみた懐かしさが、私にこのような文を書かせた。^{xvii}

二十代前半にして東京で4冊もの著書を出版し、成功したかに見えた金素雲も、実際はこのように悲哀に満ちた抑圧された生活を送っていたのである。故郷を思い、苦渋を抱きしめながら孤独と戦っていたのだろう。はたして、『朝鮮童謡選』の出版により、まとまった収入を得た金素雲は、さっそく故郷へ戻っている。1933年春のことだった。当地で久しぶりに朝鮮の子ども達の生活を目の当たりにした。

(2) 日本語で遊ぶ韓国の子ども達の姿を心配する

——「歪んだ情緒生活の中で片輪に育つわが郷土の子供たち」

日本での仕事の成功と、自信を胸に抱き帰郷した金素雲の眼に、故郷の子ども達はどのように映ただろうか。

友人と連れ立って城北洞の寺に飯を食ひに行ったところ、そこの庭に普通学校の二三年生と見られる女の子が四五人で手まりをつきながら「サイヂョウ山ハキリ深シ」をうたっている。言葉はごちなく、無論意味などを知っているわけでもない、ただ手まりをつくときはかういふのだと覚えていることらしい。…(中略)…言葉はどうだっていい、一体童心の芽は何を温床に萌え上がるのだ。意味の通じない経文をよんでいる間にあの子たちの心の世界はどうなるのだ！それが私を暗鬱にした。^{xviii}

金素雲は、久しぶりに見た郷土の子どもが、意味の分からないままに日本語の童謡を歌い、日本の子ども達の真似をして遊んでいる様子に衝撃を受けた。「歪んだ情緒生活の中で片輪に育つわが郷土の子供たち」^{xix}と事態を深刻に受け止めている。

父祖の言葉、母親の言葉で書けず、意味もわからぬ他人の言葉で歌わねばならぬ子供たち——、政治的にはたとえ彼らの支配下にあったとて、天が与えた童心の純粋さがこのように踏みにじられねばならぬものなのか？^{xx}

「<芸術の上で、文化の上で>の民族主義、<生活の実際>での世界主義」を公

言っていた金素雲が何よりも心配したのは、政治的な日本の支配などではなく、民族伝統の継承者としての子どもの情緒生活であった。つまり、朝鮮の子どもとしての童心や民族精神の消失であった。

それは、後の日本の敗戦によって祖国が解放されたときの喜びがどの部分にあったかを見てもよくわかる。

南山公園から遊園地を見下ろすたびに、私は祖国の解放、祖国の独立をもう一度、心のうちに再確認する。そこで遊んでいる子供たちの活発で澁刺とした姿——、今日、絶望にあえぐ人、飢えた人がいたとしても、祖国の独立だけは嘘ではない。わが国の子供たちがこのように力強くすくすく育っているのも、疑う余地のない明々白白たる事実だ。

…（中略）…

しかし改めて考えてみよう。その当時の生活が仮に腹いっぱい食べられるものだったとして、この南山公園の遊園地で、私たちの子供たちがこんなに元気いっぱいに笑い、走ることができたらうか。子供たちの瞳がこんなに灯火のように、きらきら輝く事があり得たらうか？

日本の子供たちが得意になって遊ぶ光景を、遠く離れて羨ましそうな目で見ていた自分の息子、娘、そして姪がそこにいなかったらうか？^{xxi}

統治する側の日本人は、日本の統治によって朝鮮に鉄道が敷かれ、近代的建築物が建立され、近代文明がもたらされ経済的に発展した、その意味で朝鮮の地で良いことをしたと考えているのかもしれない。しかし、ここで金素雲が述べているのは、仮に腹いっぱい食べられても、朝鮮の子どもたちが元気いっぱいに笑い、走ることはできなかったし、子どもたちの瞳がキラキラ輝くことはなかった、という証言である。当時の朝鮮には、「日本の子供たちが得意になって遊ぶ光景を、遠く離れて羨ましそうな目で見ていた自分の息子、娘、そして姪」がいるばかりだったと述べ、「歪んだ情緒生活の中で片輪に育つわが郷土の子供たち」を嘆いた。祖国の独立は、たとえ経済的には試練が待っているものであったとしても、「父祖の言葉、母親の言葉で書けず、意味もわからぬ他人の言葉で歌わねばならぬ」「歪んだ情緒生活」からの解放であり、「天が与えた童心の純粹さ」を誰からも踏みにじられない、この上ない歓びだったのである。

(3) 朝鮮の伝統的な教育観への反発

しかし、一方で金素雲は、朝鮮の伝統的な子どもの教育観に対しては批判的でもあった。

朝鮮の子供の世界はあまりにも暗過ぎる。大人は言ひたい放題の注文を子供の上に出す、「偉くなれ」「強くなれ」「賢くなれ」——彼等を強くするために、偉くするためにどこに、何が用意されているのだ。^{xxii}

子どもを「偉く」「強く」「賢く」するための「用意」、それは学校や教科書だけではない、子どもの精神生活のための児童文化施設や文化財のことである。すなわち子どもの好奇心や精神発達のための施設——博物館、図書館、動物園、植物園、映画館など、それから情緒生活に大きな影響を与える唱歌、童謡、童話、児童雑誌、児童図書などの精神文化である。金素雲は1920～30年代の東京で生活し、当時隆盛していた日本の童話や童謡の文化、その他盛んだった様々な児童雑誌や児童演劇などの児童文化現象に身近に接していたのだろう。また、金素雲を日本の文壇へデビューさせた人物が、そうした児童文化運動の立役者であった童心芸術主義の北原白秋だったことも大きな影響を与えているだろう。そうした日本の多様な児童文化の状況と比較して、朝鮮の伝統的な子どもの教育に反発を感じたのだろう。関連して、金素雲は自身の幼少期を次のように回想している。

私は不幸にして少年時代を持たない。若い一人の叔父が自分の見識と趣味に合はせて幼い私を教育した。十一二から演壇に立たされ、神童の天才のと讃められはしたが、お陰でもっと大切なものをそっくり置き忘れて育った。それが今も私には口惜しいのである。勇気の乏しさを感じるとき、自分の偽りに腹が立つとき、幼い頃の自分がうらめしくなるのである。

子供には子供だけの世界がある。その世界の中に自分の行くべき次の道があると思へた。^{xxiii}

この儒教的教育観への反発と、「子供には子供だけの世界がある」といった児童中心主義的な子ども観は、韓国において、「子どもの人権と近代児童文学の父」と呼ばれる方定煥^{バン・ジョンファン}の思想と彼が起こしたオリニ運動^{オリニ}と思想的に軸を同じくしている。これは方定煥が東京に留学した1920年から23年が日本の新教育、自由主義教育、童心芸術主義児童文芸の隆盛期であったことと関係しているだろう。

1921年には、童心芸術運動の中心的役割を果たした『芸術自由教育』が創刊されている。童心芸術運動は、北原白秋が代表だった。金素雲が育った朝鮮の伝統社会においてはまったく認められていなかった価値観である、「子供には子供だけの世界がある」という童心主義的な新しい価値観と思想を金素雲が持つようになったのは、やはり、自分を認めてくれた恩人である北原白秋からの影響、あるいは白秋への傾倒があったからに違いない。『朝鮮童謡選』における卓越した日本語訳の語彙の選び方のセンスは、白秋のそれとの類似性を指摘することができる。また、1921年は、文化学院、自由学園といった児童中心主義の自由教育を行う私立学校も相次いで東京に創立しており、方定煥も、このような自由教育と童心主義児童文化が流行していた東京に留学したからこそ、朝鮮初の本格的児童雑誌といわれる『オリニ』誌（1923年創刊）を民族の子どもたちのために構想したに違いないのである。

（4）韓国の子どもたちの実状

①貧しさと学校生活

金素雲は、当時の朝鮮の子どもたち、特に農村部の子どもたちの貧困について次のように証言している。

ソウルに近い幾つかの農村を訪ね歩きながら、普通学校に通う学童たちの実情を自分の目で確かめた。雨の降る日、傘をさして登校する子は十人に一人あるかないかだ。本の包みを脇に抱えて、雨にずぶ濡れになりながら素足で学校に行く。

これがいわゆる就学児童だ。^{xxiv}

それでも学校に通えるという点で、まだ恵まれている方の子どもの姿である。その4倍の子どもが学校に通えず、「統計では就学児童八十万、未就学三百六十万」^{xxv}と証言している。

しかし金素雲は、学校に通う通わないは「社会事業」の問題だといい、児童の健康な精神発達という観点からは、学校に通えないということはそれほど問題視していない。それは、次のような発言からも見てとれる。

学校に行けないがために、この子供達には童心をむしばまれる直接の被害はな

い。目に一丁字もないといっても、野生の雑草の如く、それぞれ自分なりにたくましく生い茂っている。^{xxvi}

金素雲は、貧しさのために学校に通えないことよりも、むしろそうした制度的な教育によって、朝鮮民族の子どもとしての情緒生活や純粋な「童心」を蝕まれる事を心配したのである。

自分の父母を「アボジ（おとうさん）」、「オモニ（おかあさん）」と呼びながら、学校では友だち同士口げんかをするにも、「イジャシッく（このやろう）」「チョジャシッく（あのやろう）」と言えず、ぎこちない日本語を使わねばならぬ八十万の就学児童、ソウル市内のモデル・スクールである寿松学校などでも、<朝鮮語>をひと言使うたびにカード一枚ずつを相手方の子供がもらい集めて教師に報告し、カードがある数に達すると罰則として教室の掃除をするようになっていた。^{xxvii}

金素雲は、こうした日本語（当時は「国語」と呼ばせて絶対化していた）の強制によって朝鮮の子どもとしての精神をゆがめられてしまうのであるならば、いっそ学校などには通わないほうが良いと述べている。「朝鮮の童心」こそが、民族の宝であり、将来の希望であると考えていたからに違いない。

②学校で宣伝された日本の児童雑誌

金素雲は、朝鮮の民族文化の継承者であるはずの子どもたちが、日本の学校に通うことによって子どもの純粋な童心を蝕まれ、情緒生活が歪んでしまうことを何よりも心配した。そして、その情緒生活というものは、日本語で学ぶ授業時間や教科教育にあるのではなく、むしろ「休み時間」にあったというのは、金素雲らしい指摘である。すでにみたとおり、友達と喧嘩するのも母国語で出来なかったこと、休み時間であっても「朝鮮語」を使ったら罰を受けたことなどがその事例であった。

しかし、それに加えて、次の証言は、児童文化研究において非常に意味深い内容を示唆している。そして、朝鮮の子どものための児童雑誌を創刊させた金素雲らしいするどい観察でもある。

どんな田舎の学校に行ってみても、教室の横には日本で発行される児童雑誌の広告ポスターがいっぱい貼られている。一冊五十銭する雑誌を買える余裕のある層の子弟たちももちろんいた。「幼年倶楽部」「少年倶楽部」のような講談

社の雑誌、あるいは小学館が出す「一年生」から「六年生」までの学年別雑誌——このような本を買える子供たちは、いわば特権階級だ。

日本人が日本の児童のために作り出したこんな雑誌を学校では歓迎するが、郷土性とか生活風土とかに何の共通性もない、この国の幼い童心には貧乏な子供に対する優越意識を助長させるばかりで、心の栄養とはかけ離れていた。^{xxviii}

金素雲のこうした問題意識は、朝鮮の子どものための児童雑誌創刊のために彼を奔走させた。朝鮮の「郷土性」や「生活風土」に根ざした「心の栄養」となるものを子どもたちに与えたい。これが、朝鮮の子どもたちのための児童文化運動に心血を注ぐようになった金素雲の動機である。

③朝鮮の児童雑誌

児童文化は、幼い子どもの心の栄養でなければならない。それなのに学校では「郷土性」とか「生活風土」が異なる日本の雑誌ばかりが宣伝され、子どもの特権意識を育て悪影響を及ぼしたと金素雲は訴える。

ところで、当時、朝鮮の人の手による児童雑誌が無かったわけではない。しかし圧倒的に部数が少なかった。これに関して、金素雲は以下のように証言している。

私たちの手で作り出された児童雑誌がなかったわけではない。小波・方定煥が創刊した「^{オリニ}子供」は一時、八千部まで刷ったという。しかし、そのピークはすでに過ぎ去り、新聞社が発行する「少年朝鮮」「少年中央」のようなものがあつたが、発行部数は千から二千、それさえも学校の中にはただの一冊も入り込めなかった。学校とは縁のない<未就学児童たち>は別問題としても、<就学児童>が八十万。雑誌がたとえ学校に入るとしても、千部二千部の雑誌では話にならない。学年別には出来なくとも、高低、二種類で十人に一冊ずつ手に入る十銭雑誌を——、しかし、これは理想だ。手はじめに一種類だけとして二十人に一冊ずつ、四万部は刷らねばならない。^{xxix}

金素雲は、『朝鮮童謡選』で成功したあと、すぐに帰郷した。そして朝鮮の子どものおかれている精神文化的状況を目にし、独自の児童文化運動を始めることを決意した。その「手はじめ」は、児童雑誌の創刊であった。

これまで見てきたように、民族の子どもの「童心」を蝕み、歪んだ精神をつくる原因を、近年の植民地研究で行われてきたような制度的学校教育の中身、例えば教

科書等での教育内容に求めている点で、筆者は金素雲に注目している。金素雲は、制度上の学校教育ではなく、その周辺にある児童文化の領域にこそ、民族文化継承の上で重大な役割が潜んでいると考えたのである。

5. おわりに

『朝鮮童謡選』と『朝鮮民謡選』で日本で成功した金素雲は、すぐさま祖国に帰国した。日本で得た資金を元に、故郷の子どもたちのための児童雑誌刊行を初めとする「児童文化運動」をはじめた。1933年9月に「朝鮮教育会」を設立し、34年から36年にかけて『児童世界』『新児童』『木馬』『幼年木馬』などの児童雑誌を朝鮮語と日本語の併用というかたちで刊行している。金素雲が刊行したこの児童雑誌の中身と刊行に関連した詳細は他稿にゆずるが、金素雲はすでに『朝鮮童謡選』の序文に、「文化の精神の上で迷児となるな。奇形児と呼ばれるな。」というメッセージを書いている。ここからは、金素雲が祖国でまず始めに児童文化運動を始めようとした動機と思想、願いを読み取ることができる。

こうした1930年代の金素雲の思想と行動は、1910年代の崔南善^{チェ・ナムソン}、20年代の方定煥に続いている。崔南善と方定煥の活動は、拙稿「近代日韓児童文化関係史試論」^{xxx}を参照されたい。崔南善・方定煥・金素雲の三人は、日本で近代文化を学んだ結果、祖国に必要なものを児童文化の領域に見出していたのである。

当時、日本の統治を受けていた朝鮮を考察するときに、「児童文化」の領域は、重要な意味を持っている。なぜならば、例えば、同じ子どもの生活と成長に関わる領域で重要なものとして「教育」が挙げられるが、教育というのは体制や制度の枠組みから逃れることはできず、当時の朝鮮の場合、朝鮮総督府の統制と植民地政策から大きな制約を受けていた。しかし、そもそも制度から外れたところにある周辺領域である児童文化では、比較的自由に朝鮮の子どもたちのための情緒生活に向かい合っていたはずであるからである。上述の三人は、民族の将来のために、未来を担う子どもたちのための文化運動を行った。三人の共通点は、日本への留学から帰国してすぐに朝鮮の子どもたちのための児童雑誌を刊行している点である。児童雑誌の刊行という、制度や体制から外れた周辺領域に活路を見出したのである。

*本稿は、韓国延世大学校大学院より2002年8月に授与された博士学位（教育学）論文『近代韓日児童文化教育関係史研究』（韓国語）と、韓国語著書『近代韓日児童文化文学関係史（1895～1945）』（ソウル：青雲、2005年1月）において韓国語で

発表した内容をもとに、新たに日本語で書き直したものである。

*本稿は、文部科学省科学研究費採択課題「植民地朝鮮における近代児童文学の成立と日本児童文学の交渉」(研究課題番号：19720084)に関連する一連の研究の一部である。

1908	1.5 釜山、絶影島に生まれる (本名：金教煥)
1920 (12 歳)	-. 渡日 (大阪)
1921 (13 歳)	-. 東京、開成中学校 夜間部 入学
1924 (16 歳)	-. ソウル、帝国通信 京城支社 入社
1925 (17 歳)	-. 釜山、朝鮮日報 通信員
1927 (19 歳)	-. 白鳥省吾主宰『地上楽園』に「朝鮮の農民歌謡」連載
1929 (21 歳)	7. - 『朝鮮民謡集』泰文館 10. - ソウル、毎日申報に学芸記者として入社、以後2年間読者の協力で全国の口伝民謡三千を採集
1933 (25 歳)	1. - 『朝鮮口伝民謡集』第一書房 1.15 『朝鮮童謡選』岩波文庫 6. - 『朝鮮民謡選』岩波文庫 9. - 東京、高円寺に「朝鮮児童教育会」設立

<表1> 金素雲 略年表① (1933年まで)

資料：金素雲『天の涯に生くるとも』新潮社、1983年5月25日

金素雲『声明書』朝鮮児童教育会、1936年5月1日を参考に作成

- i 児童文化・文学研究の立場からは、佐藤宗子「金素雲著『近く遙かな国から』」、『比較文学研究』38、東大比較文学会、1980年9月がある。
- ii 朝鮮教育会『文教の朝鮮』京城、1933年7月、95号
- iii 金素雲訳編『朝鮮童謡選』岩波文庫、1993年2月5頁(初刊は1933年1月)
- iv 林鐘国『親日文学論』(ソウル：平和出版、1966年8月)では、金素雲を親日作家として取り上げている。
- v 林容澤『金素雲『朝鮮詩集』の世界——祖国喪失者の詩心』中公新書、2000年10月のように、「親日派」として簡単に否定しない新しい金素雲論も韓国人研究者から最近出てきている。
- vi 前出、『朝鮮童謡選』5頁
- vii 前出、254頁
- viii 前出、6頁
- ix 前出、6頁

- x 大竹聖美「明治期少年雑誌に見る朝鮮観——日清戦争（1894）～日韓併合（1910）前後の『穎才新誌』・『少年園』・『小国民』・『少年世界』——」朝鮮学会『朝鮮学報』第188集、pp.77～103、2003年7月
- xi 前出『朝鮮童謡選』15頁
- xii 李在徹「韓日児童文学の比較研究（1）」、『韓国児童文学研究』創刊号、韓国児童文学学会、1990年7月
- xiii 前出、『朝鮮童謡選』249頁
- xiv 前出、251頁
- xv 前出、17頁
- xvi 金素雲『天の涯に生くるとも』新潮社、1983年5月、195頁
- xvii 前出、194頁
- xviii 金素雲『声明書』朝鮮児童教育会、1936年5月1日、2頁
- xix 金素雲『天の涯に生くるとも』新潮社、1983年5月、193頁
- xx 前出、194頁
- xxi 前出、192頁
- xxii 金素雲『声明書』朝鮮児童教育会、1936年5月1日、2頁
- xxiii 前出、2頁
- xxiv 金素雲『天の涯に生くるとも』新潮社、1983年5月、195頁
- xxv 前出、192頁
- xxvi 前出、196頁
- xxvii 前出、196頁
- xxviii 前出、196頁
- xxix 前出、196頁
- xxx 『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』、『児童文学研究大会』別冊特集号、2004年3月、6～22頁